

小野田修道院

1. 私たちの実践の中から

- ① ホームには広い庭園と畑があり、創設当初からこの土地を大切にされて来た先輩たちの思いに触れることが出来る。私たちも休日を利用して除草や畑作りをし、庭で穫れた梅・あんず・栗を感謝していただき、姉妹が畑で育てた野菜は、共同体はもちろんホームの食卓や職員・教会の方におすそ分けする。
- ② ホーム調理場で出た野菜の皮や切りくずは畑のコンポストで肥料にする。一方、修道院では 2020 年に市の助成金を利用して家庭用生ごみ処理機を購入し、「生きるちゃん」と命名して使用している。果物や野菜の皮、残菜を洗って水気を切り小さな「生きるちゃん」に投入すると、バイオ材と攪拌して乾燥させ肥料を作ってくれる。これを畑やプランターで土と混ぜて利用している。洗濯場に置いているが音や臭いも気にならない。静かにしっかり働く「生きるちゃん」である。
- ③ 異動して来られた姉妹のリードで、食事に使ったお皿拭きが新しく加わった。食後の会話中に各自で使った食器を小さくちぎった新聞紙で拭き取ると、水分と油汚れが落ちて下水を汚さず節水もできる。調理後の鍋やフライパンも同じようにする習慣が身についてきた。
- ④ 食材の買い物の際には、先ず「フードロス削減に協力を…」のコーナーの物から選び、調理ではキャベツなど一番外の葉も利用して、野菜はほとんど廃棄無しで活用できる。いただき物が多い時には冷凍保存し、果物・野菜の保存方法を研究している。食事の残り物は姉妹がアレンジして次の食事の一品として食卓に並び、共同体に喜びを与えてくれる。
- ⑤ 環境に配慮した洗剤の利用と洗濯時間の短縮で、いのちと環境への回心を生きるよう心がけた。

これらのどれもが知識としては知っていたことだが、実際に共同体皆で心と手を使って生きることを通して、ひと手間をかけることが大地の叫びに応える私たちの愛のしるしであること、それが共同体の喜びになっているのだという気づきをいただいた。

2. ふり返りと分かち合いから

- ・事業所で働く姉妹に協力を惜しまず、自分の生き方も回心の道を目指したい。
- ・自然災害環境破壊の原因は「わたし自身にある」ことに気づき始めた。日常の中で努力しながら生活したい。
- ・地球環境に注意を向け、自己の日常生活を見直した。世界の現実にもっと目を向けたい。
- ・「会員だより」の記事が刺激と励みにつながった。

- ・個人に語り掛けられるパパ様の声（神様の声）に心の耳を開き、努力を続けたい。祈っていると日々の生活の中で思い出し、気づきを与えられる。
- ・個人として、共同体として大切なものは何か、何が優先かを考え生活していきたい。
- ・私にできることを通して、生命、環境への回心、節電、節水に努める。
- ・互いに自分に出来ることを出し合い、補い合っていきたい。
- ・世界の国、人々、環境などについて発信されている情報を分かち合うようにする。

3. 呼びかけに応じて

夕食後の霊的読書の中で、教皇フランシスコの「食べ物が捨てられる時にはいつでも、貧しい人、飢餓に苦しむ人たちのテーブルから盗んでいるのと同じだということを、しっかり覚えておきましょう。」（「教皇フランシスコとともに日々の内省」）との言葉が、私たちの心に響いてきた。また、2020年「すべてのいのちを守るための月間」日本カトリック司教協議会会長談話も、私たちに生活の振り返りと回心への示唆を与えてくれている。

面倒な仕事に心をこめることが愛のしるしであり主イエスに倣うことなら、私たちが聖母マリアと共に「いやなことは私がよるこんで」小さなことを積み重ねる日々の回心に、今日も励みたい。

